



機関リポジトリ概論

村上祐子

国立情報学研究所

学術コンテンツサービス研究開発センター

特任准教授

teamwork

teamwork

日本の国際的存在感向上



学術の側面で何ができるか？

- 日本の学術機関の存在感強調
- 日本の学術成果の国際発信力向上
- 研究成果の国内確保と有効利用

インフラとしての学術情報流通システムが
一つの鍵を握る



学術情報流通

学術情報<<<<<コンテンツ・情報・出版

- …ではあるが、この産業の一翼をなしている。
- ユーザ＝研究者は、ほぼ流通に関心なし
その場で必要な情報が手に入ればいい
- …ではあるが、研究者はただの消費者ではない

研究者＝生産者

学術情報の特性＝「学術情報の再生産」

ボーン・デジタル資料向け 新しい学術サービス:発信

- 紙の発想の既存サービスは受信者向け
 - 学術情報流通の最前線→目録・検索・ILL
 - 学術図書
 - 学術誌
- 学術情報の生産者と消費者を結ぶ



研究者は自分を売り込む「営業」でもある
→生産側への学術情報流通支援はマーケティング支援

機関リポジトリ

- 学術情報生産者としての研究者を所属機関が支援する「手段・しかけ」(インフラストラクチャ)の一部

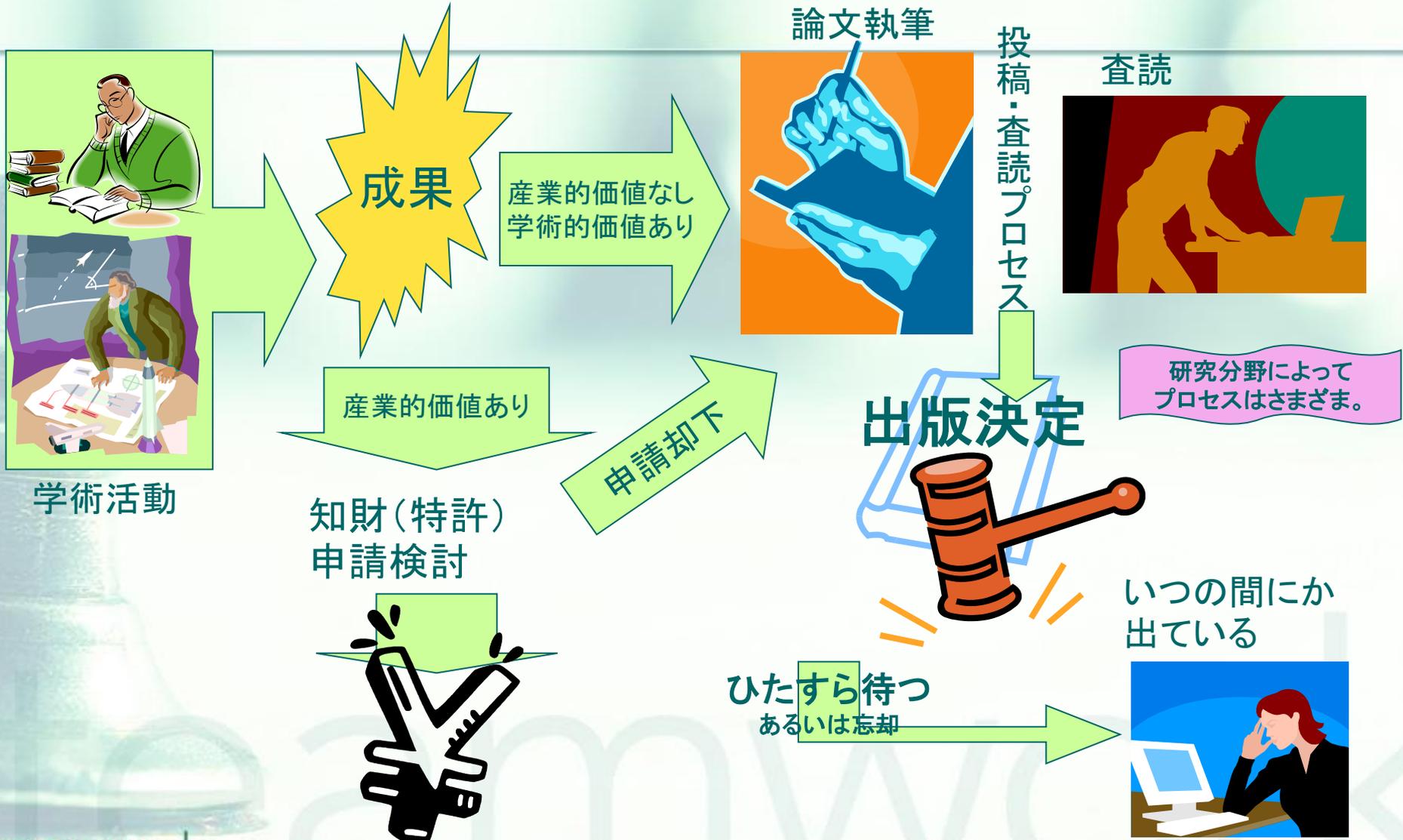


目的

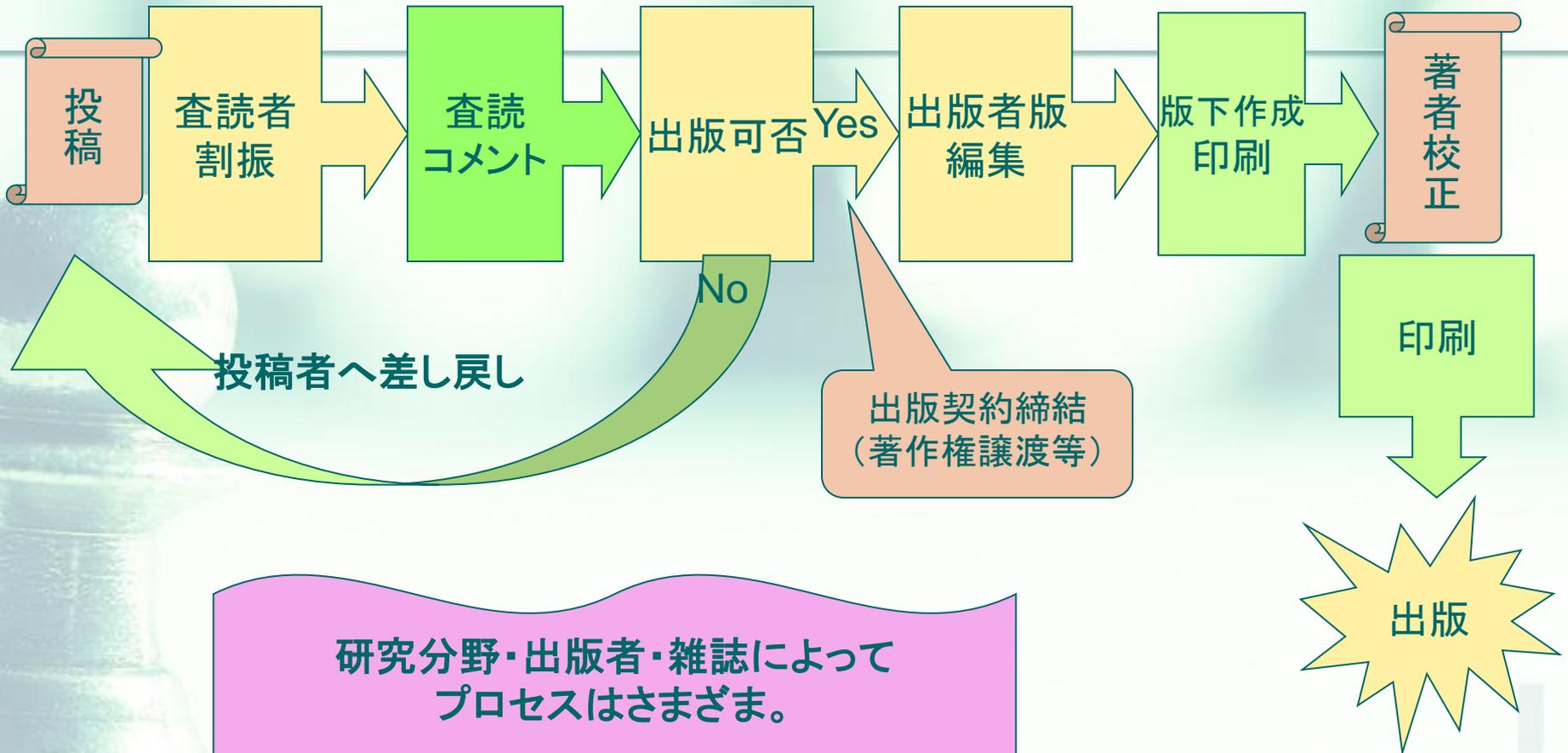
生産物＝学術成果がもっと多くの人に届くように

- 「電子ファイルをオンライン配信」で実現
- サービス・コストは機関が負担＝読みたい人は誰でも無料でアクセス

学術情報流通（生産側）



査読から出版まで



研究分野・出版者・雑誌によって
プロセスはさまざま。

全部電子システム上～原則全部紙

出版から流通へ



- 紙: →流通センター→書店→図書館→読者
- 電子ファイル: サーバー→読者
- 表向きには中抜き現象発生
- 裏では「システム」の役割が増大
 - 契約処理
 - 二次情報機能
 - ネットワーク



ユーザは無意識
=インフラのあるべき姿

インフラ整備は目的ではなくて、手段。

Preprint交換文化



- 1974- プレプリントサーバ:分野別
 - 数学
 - 高エネルギー物理学
 - 経済学
- 1999 サンタフェ universal preprint service
 - OAIに発展



Preprint



査読



Postprint



編集
校正



出版さ
れた論
文

紀要交換文化



- かつては世界的な学術成果発表形態
- 学科・学部レベルでの出版
 - 研究者の「同人誌」のようなもの
 - 査読のある紀要もある
- 紀要同士を「交換」することで流通

交換文化には「ビジネス」の余地なし

商業出版者の参入

科学技術
投資増大

研究者数
増大

成果発表
圧力増大

出版数
増大

手間暇
増大

ビジネス
チャンス



購読料
モデル

Publish
Or
Perish



研究者の片手間では
もはや流通まで
手が回らない

背景

科学の職業化
国家的科学振興
巨大科学へのシフト

購読料モデル: 価格 = コスト / 購読数

紙の時代

研究者増による
出版コスト増大



購読数減少 価格高騰

ビジネス
モデル継続

シリアル・クライシス



電子時代

研究者増による
出版コスト増大

システム過剰投資
による出版コスト増大

コスト増
による加速

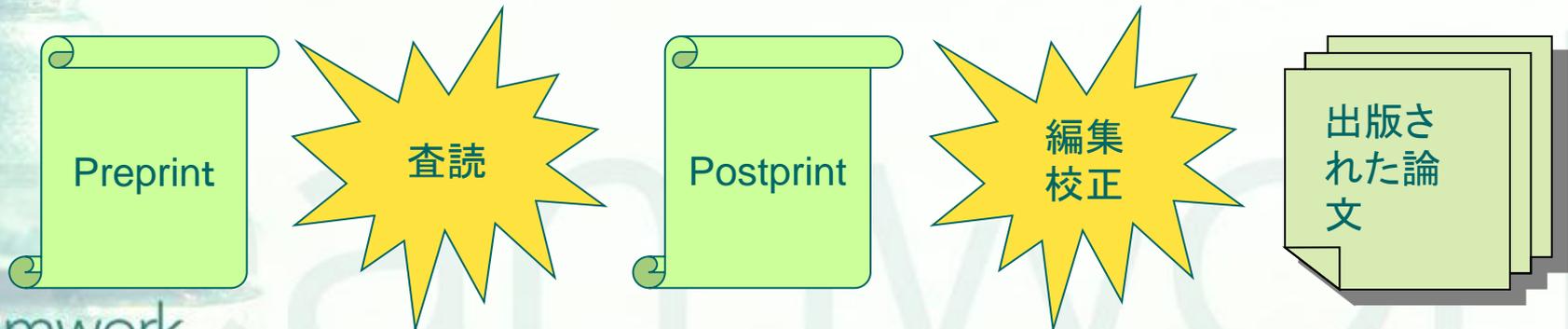




オープン・アクセス

- 定義：出版済の査読付き学術誌論文への無料・オンラインのアクセス

問題：どうやって実現するか？



オープン・アクセス



■ 動機

- オンラインならそもそも出版コストはただ同然
- 研究者がコストを負担するのは学術出版の本来の姿にもとる

■ ネットワーク・コストは転嫁済

- 商業出版者はただ乗り

■ 「査読・編集コスト」

- 査読料はない(研究者のボランティア)
- 出版プラットフォーム貸しをしているなら、学会＝研究者集団からシステム・コスト回収済のはず

オープン・アクセス



- コストがあるとすれば誰が負担？

→ 著者・所属機関・研究助成機関

1. OA著者投稿料モデル
2. OAハイブリッド：割高な投稿料を払えばOAと出来る

- 商業出版社でも認める「現実的」解
- 「OAで被引用数があがるなら」と払う
- 手が出ない研究者も少なくない
- Big dealの対象となる



オープン・アクセス



- “Green” : 購読料モデルとの併存
- 自己使用としてセルフ・アーカイヴィングを著作権譲渡の留保条件として認める出版契約
 - SPARC推奨モデル
 - 「著者の権利」



OA実現手段としてのリポジトリ

- OA公開が要請され、かつ
- 特に日本の研究者が投稿料モデルのOAジャーナルに投稿しない・できないならば、

日本におけるOAの実現方式として
機関リポジトリが有望

GreenOAは学術情報流通円滑化のひとつの手段

情勢は極めて流動的



■ システム・制度・コスト
...

「どんな情勢でも使える」
だけではなくて、
「どんな情勢でも不可欠」
なシステムへ！

原則的無節操の原則



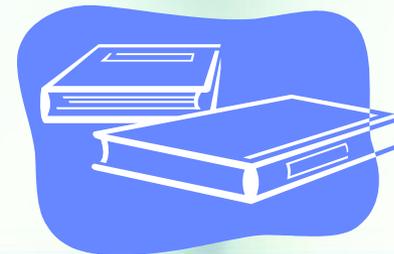
Principle of principled
promiscuity

日本発の機関リポジトリ思想

- 機関リポジトリには何でも入れてしまおう！

何をどう使うかは利用者が決める。

日本における学術出版



- 国内に商業的学術出版社は事実上**ない**
 - 学術出版の判定基準「研究者による査読有」
- 海外出版社の国内学会出版は発展途上
 - 日本語の壁？英語の壁？
- 日本の研究者の英語論文
 - 80%が海外学術誌へ
 - 注：これ自体は英語の問題ではない
 - カナダの研究者の論文も80%は国外へ



日本における学術出版（日本語）

■ 日本語論文の発表先

- 国内学会誌
- 紀要（一部査読有）
- 論文集（著書）

■ 商業誌（査読なし）

- ■ 例「思想」「現代思想」

世界への流通
はほとんど無い

周回遅れの「最先端」
商業ベースでない
学術情報流通の一つの姿

大半が採算が取れない
ボランティア・ベースの
編集・出版

専任の事務局担当は少ない
大学院生・ODのことも
著作権等制度未整備





IRによる流通支援

課題：学術情報生産・流通コスト最適化

日本ならではの機関リポジトリを目指そう

- 日本語の成果も国際流通経路に乗せられる
- 研究成果の確保：商業ルートに乗っていない部分もカバーできる
- データ・マルチメディア資料と連携した高次利用も視野に入る

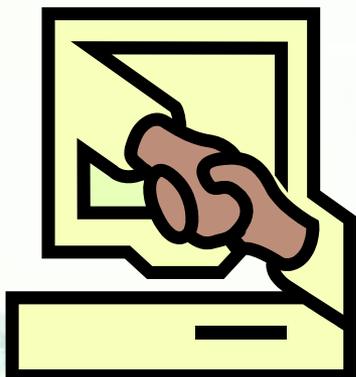
ユーザ重視マーケティング

- 大学経営層・図書館幹部・研究者それぞれに示すべきこと

その人がリポジトリで
享受できるメリット

ターゲットを絞った
マーケティング・リサーチが必要

「営業」としての研究者



- ★別刷交換は名刺代わり
- IR＝オンライン営業活動支援
- 研究活動と学術情報
 - 分野による違い:「紙」文化は根強い
 - 個人による違い:情報への関心、技術への関心…

営業活動支援のアイデア

- 流通支援：
 - あちこちのチャンネルで検索に引っ掛かるように
- 名刺本体はだれでも見られるように
 - 本文がなければ無意味
- もらったひとが使えるように
 - 簡単に出版社版にアクセスできる書誌情報
 - 再配布・利用可能なのか許諾条件
- 異動後の利用を簡単に
 - 【固定URLが売り込みポイント】
 - 学内サーバでは持ち運び困難

紀要・学会誌出版者としての研究者



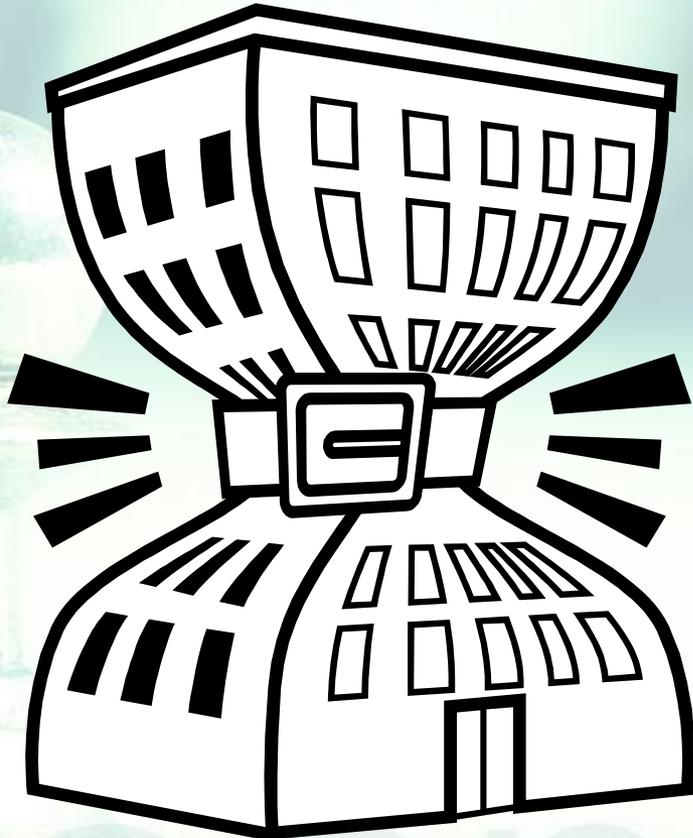
- すでに「営業支援」の観点をもっている。
- オンライン化によるメリットを強調
 - コストダウン: 出版・流通
 - 可視性向上
- 機関リポジトリで支援できる内容を伝える

学術情報活動でのIR



- 業務効率化・透明化
- 活動記録・報告
 - 学術成果の社会還元の一環
- 学内情報の一元管理

図書館活動でのIR



- 大学全体での位置づけ
- 業務効率化・透明化
- 例：紀要・学位論文の電子化
 - ILL不要
 - 棚スペース・冊子管理不要